世の成り立ち

一神教の世界

松原秀一

東書選書
40

の説話

●東と西の出会い

東書選書40

中世の説話—東と西の出会い—

昭和五十四年七月五日　第一刷発行

定価　九八〇円

著者　松原秀一

発行者　鈴木和夫

発行所　東京書籍株式会社

東京都台東区台東一—五—十八　〒一一〇

印刷・製本　図書印刷株式会社

© Hideichi Matsubara 1979, Printed in Japan

乱丁・落丁の場合はお取替いたします　0398-599040-5313

目

次

説話の故郷

説話の故郷……7
万葉の浦島太郎　西洋浦島　フランスの仙境譚　「ギンガモール」　天上の悦び　モーティフの共有　他国の説話の流入　起源論研究のために

インドと西欧……44
ヨーロッパの由来　地中海世界　古代インドとペルシャの交易　インド文明の光　インドの驚異　キリスト教の東方関心　ヨーロッパ人のインド観　インド研究の端緒　アンクティルのインド古典紹介　イギリスの植民地支配　サンスクリット文献の翻訳　植民地支配と類似民話の発見　インドの民話とヨーロッパの文学　インド起源説の流行　インド起源説の衰退　説話研究の今後の展開

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

説話の東西

一角獣の話……97
中世説話との出会い　なおざりにされていたジャンル　説話の寓意性　仏陀伝から聖者伝へ　「一角獣の話」の伝承　日本への渡来

小鳥の歌……128
古写本研究を始めた頃　田舎者と三つの教訓　『さんとすの御作業の内、抜書』　『伊曽保物語』　「小鳥の歌」比較論

ささやき竹……150
パリの古本屋で　日本の「ささやき竹」　『新百物語』をめぐって　ラ・フォンテーヌの「隠者」　『デカメロン』第四夜 第二話　『ユダヤ古事談』　『アレクサンドロス大王伝』　当意即妙の言葉　説話の複合と伝播　失われた環を求めて

すり替えられた手紙——沼神の手紙……191
騎乗のコンスタンティヌス帝像　『クースタン帝王の話』　韻文作品と散文作品　各国の類話　「ウリアの手紙」　南方熊楠の研究　「沼神の手紙」

五度殺される話——智慧有殿……210
動きまわる死体　「香部屋係の僧」　シャブランの「香部屋僧」　死後の遍歴　せむしの死

宝蔵破りの話——ランプシニトス王の宝……242
ヘロドトスの盗賊譚　『今昔物語』の盗賊親子　仏自らが説く前生盗賊譚　西欧中世二つの説話集　盗賊譚の大衆小説化　宝蔵から女の部屋へ　エジプト起源説とバビロニア起源説　東西間説話の架橋

あとがき……281
参考文献……284
索引（人名・事項）……287

装幀・勝井三雄

説話の故郷

説話の故郷

万葉の浦島太郎

《春の日の　霞める時に
住吉の　岸に出で居て
釣船の　とをらふ見れば
古の　辞ぞ思ほゆる
水江の　浦島の子が
堅魚釣り　鯛釣り誇り
七日まで　家にも来ずて
海界を　過ぎて漕ぎ行くに
海の　神の少女に
たまさかに　い漕ぎ向ひて

あひかさらひ　事なりしかば
かき結び　蓬萊山にいたり
海神の　神の宮の
内のへの　妙なる殿に
携はり　二人入り居て
老いもせず　死にもせずして
永久に　在りけるものを
世の中の　しれたる人の
我妹子に　告りて語らく
暫くは　家に帰りて
父母に　事をも告らひ
明日の如　我は来なむと
言ひければ　妹が言へらく
蓬萊山辺に　復帰り来て
今の如　逢はむとならば
此の篋　開くなゆめと
そこらくに　堅めしことを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

住吉に　還り来りて
家見れど　家も見かねて
里見れど　里も見かねて
怪しと　そこに思はく
家ゆ出て　三歳の程に
墻もなく　家失せめやと
此の篋を　開きて見れば
もとの如　家はあらむと
玉篋　少し開くに
白雲の　篋より出でて
蓬萊山辺に　棚引きぬれば
立走り　叫び袖振り
こい轉び　足摩しつゝ
忽に　心消失せぬ
若かりし　膚も皺みぬ
黒かりし　髪も白けぬ
ゆな〳〵は　息さへ絶えて

後遂に　命死にける
水江の　浦島の子が
家処見ゆ》　（「詠二水江浦島子一二首并短歌」、『万葉集　上巻』巻第九、有朋堂文庫、昭和三年）

戦争中の東京の生活で、楽しみは本を読むことであった。食物は不足し、制服のボタンも供出し革靴はなく、中学生も工場に動員されズック靴で工場に通った。蒲田の工場が空襲で焼けてしまうと、住宅地の強制取り壊しに各所に行かされる日々であった。その行き帰りも何か本を携えて行って空想に遊んだ。文庫本を多く持ち歩き読んだが、手頃で丈夫な有朋堂文庫は字も細かくなく、目下の戦争とは全く違った世界が繰り広げられていて好んで読んだ。

その中の『万葉集』二巻は解るところを拾い読みするばかりであったが、その中でたまたま、この浦島の長歌を見付けたのである。亀にのらない浦島太郎であるが、同じ話であることは明白である。浦島太郎の話は、絵本でまず親しみ、小学校の読本にも出てきたが、こんなところにもいようとは予期していなかった。当時は日本民族について「悠久」というようなことがよく叫ばれていたが、そうした言葉よりも万葉の中にいる浦島に自分の属する民族の「悠久」を実感させられる思いをした。

幼い頃、親しんだ絵本では、亀を子供たちの手から救う場面、釣竿を肩に大亀にのって海原を行く姿、乙姫の不思議な装束を思い出す。竜宮での楽しい暮しの中で、ふと座敷のふすまを開き、

春景色、夏の景色と見ほれていく浦島が、冬景色の中に、自分を待ちわびる年老いた両親の姿を認め、たまらず望郷の想いにかられる場面が心に沁みた。「昔々、浦島は、助けた亀に連れられて」という童謡はオレンジのラヴェルの小型のレコードで繰り返しかけたものであった。

有朋堂文庫には『御伽草紙』もあり、子供の頃絵本で読んだ唐糸や物ぐさ太郎、鉢かづき、義経、酒呑童子、俵藤太、一寸法師が古文で出てきたが、浦島太郎もちゃんと顔を出していた。

「御伽草子」の中の浦島では、亀を助けた浦島が海上で翌日出会うのは、小舟にのった美女で、これを送って十日も船旅をする。船から陸に上ると「白銀の築地を築きて、黄金の甍を並べ門を建て、如何なる天上の住居もこれにはいかで勝るべき」ありさまで、ここで女と結婚して暮しているうちに、ここが竜宮と解る。四季を示す景色も出てきて「先づ東の戸を開けて見れば、春の景色と覚えて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、たなびく雲の中よりも鶯の音も軒近く、何れの梢も花なれや。南面を見てあれば、夏の景色と打見えて、春を隔つる垣ほには、卯の花や先づ咲きぬらん……」と美しい描写が続き、北景色の「さて又北を眺むれば、冬の景色と打見えて、四方の梢も冬枯れて、枯葉に置ける初霜や、山々や只白妙の、雪に埋るる

浦島太郎(小学読本国語，昭和三年)

谷の戸に、心細くも炭竈の、煙に著き賤が業、冬と知らする景色かな」と風情ある冬景色まで続く。

ここに楽しく三年過した浦島は三十日の暇を貰うと、女は自分こそは助けられた亀であることをここで打ち明け、泣く泣く筥を与えて、歌を送りあって別れる。浦島が故郷に戻ると七百年経ってしまっている。墓所を教わり、詣って涙を流し、歌をよむ。

仮初に　出でにし跡を来て見れば
　　虎臥す野辺と　なるぞ悲しき

松の木陰で筥を開くと、三筋の煙が上り、たちまち年寄りになり、鶴に化して天に舞う。後に丹後の国に浦島明神となって現われ、亀も神となって夫婦の明神となったという。

こうして絵本の話の四季の窓は、ここらから出たものらしいと見当が付く頃には、「日本書紀」にもまた、「風土記」等にも浦島の話があることも解ってきた。日本に太古から伝わる話で、国民童話として多くの世代の親しんだ話として、心の温まる想いがしたものであった。

西洋浦島

浦島と同様に仙境に数日を過して戻ってくると、長い年月が経ってしまっていたという、リップ・ヴァン・ウィンクルの話がアメリカにあると数年後に知った時は、また別の感慨に打たれた。

旧制中学の図書室から借りた中国の仙人の列伝では、仙境が始終出てくるし、きこりが山中で仙人の打つ碁に見とれ、いざ帰ろうとすると斧の柄がボロボロになって長い年月を証していた話

なぞも、印象深く読んだが、同様な話がアメリカにあろうとは思ってもみなかった。

アーヴィングの『スケッチ・ブック』を読んだのは、大分あとで、戦争は終っていたから、リップ・ヴァン・ウィンクルの話はたしか徳富蘆花の小説に出てきて知ったのではなかったろうか。

有朋堂文庫には江戸文人の随筆もいろいろ入っていて「骨董集」「燕石雑志」「用捨箱」が一冊に収まっているものがあった。この中で、馬琴の浦島についての考証を読んだのも戦争中のことで、家族の疎開してしまったあと、人気のない縁側の日溜りで空腹をかかえて読みちらした。「猿蟹合戦」「桃太郎」「舌切雀」「花咲爺」等に種々の古典や中国の文献が挙げられている。蟹満寺縁起まで挙がっていたように思うが、どの話も馬琴の挙げる中国の文献とは遠いようにも思われた。漢文で書かれた本というものが山ほどあり、学校で習う嫌いな漢文とは全く違って面白そうであったが、どこに行けばそんなものがあるのか思いもよらなかった。馬琴の同じ随筆には、漱石の「猫」の中で迷亭が精養軒のボーイを困らせる「トチメン棒」が「トチメク坊」であるといった考証があったりして、雑読の楽しさを味わった。岩波文庫でヨーロッパ文学の邦訳も読んだが、戦時色下の工場なぞでは外国のものを読むのは何か後ろめたかった。国文学の方が無難であったのかもしれない。空襲が一晩に二回もあって眠れないのが辛く、殺伐たる毎日を余儀なくされている時には、江戸時代の随筆は別天地で、恰好の避難場所になっていた。

当時読んだ吉岡修一郎氏の数学についての随筆集の一冊に、因幡の兎の南方の類話が挙げてあり、わにを数えながら、渡りきり、それから自分のたくらみを明かしたり、「わになら川を流れ

るだろう、木なら遡るだろう」と言って試す、賢い兎がジャワにいることを知って興味深く思ったものである。柳田国男氏の『日本の昔話』で民話にいろいろな形があることも知った。山の手育ちで、昔話も印刷本で覚えた身には、人により所によって同じ話にいろいろな伝承があることは、呑み込みにくいことであった。柳田氏の諸著によって言葉ばかりでなく、器物の形から握り飯の形までに起源や忘れられた意味があることを知ったのも、新鮮な知識であった。

フランスの仙境譚

戦争が終ると全く新しい世界が拓け、興味は外国に向かってしまった。十年ほどのうちにフランスで勉強する身となり、現代フランス語から古いフランス語に興味が移ってゆくと、思いがけずまた、仙境譚に出会ったのであった。

十二世紀のフランス文学中に「ブルターニュのレ」(Lais bretons, Lais de Bretagne) と名付けられる短い物語詩が、二十篇ほど残されている。

そのうち十二篇はマリ・ド・フランスという女流宮廷詩人の作とされ、他にも、一、二、作者名の伝わる作品があるが、作者不明のままのものも十篇ほどある。これらの作品を伝えるのは十三、十四世紀に書かれた羊皮紙の写本であり、イギリス、フランスの図書館に所蔵される数冊の古写本である。その中でもマリ・ド・フランスの作品のほとんどを含む写本、大英図書館ハーレイ九七八番写本と、マリの「レ」と作者不明の「レ」計二十四篇を含む、パリ国立図書館の新収

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c